

香港手話の広東語への翻訳：語順の相違をどう乗り越えるか

フォン・シュマン

(中国・香港中文大学)

本発表では香港手話から広東語への同時翻訳の際に翻訳者が直面する語順の問題を取り上げる。これら2つの言語は、基本語順として主語－動詞－目的語 (SVO) という同一の語順を持っているが、機能範疇すなわち、法動詞、助動詞、否定詞は異なる語順を持っている。それらは、香港手話においては動詞句の後ろにあらわれるが (Lam, 2009)、広東語では動詞の前に現れる (Matthews & Yip, 2011)。このような語順の違いは、香港手話から広東語への同時通訳の際に、通訳者をまごつかせることになる。この問題を探求するために、生え抜きのろう者である香港手話の話者を招いて3つの短いクリップが記録された。1つ目のクリップは自己紹介であり、2つ目のクリップはパワーポイントの短いプレゼンテーションである。3つ目のクリップは vlog である。これらのビデオは、3つ合わせて15分ほどの長さである。11人の生え抜きの広東語話者がこのビデオを香港手話から広東語に翻訳した。データからは、語順の修復が言語出力に現れる一方、標準的でない語順も生じることがわかった。前者は、法動詞、助動詞、否定詞の位置での不正なスタートからなっており、後者は異なる広東語の焦点構造を含んでいる。翻訳者は、法動詞、助動詞、否定詞を発言の末尾に向けて、他の統語的な位置に移動させるという焦点シフト戦略を目標言語の中で採用していた。それは、焦点－評言構造や、右方転位、そして3つの異なる標識、すなわち焦点標識 *hai6*, 等位接続語 *zau6*, 量化副詞 *dou1* を含む。